

記録
16ミリ
カラー／25分
日・英語版

■企画
(財)国際開発高等教育機構

スタッフ

■製作
村山英世
■脚本・演出
吉野 篤
■撮影
山屋 恵司
■編集
近藤光雄
■選曲
山崎 宏
■解説
長谷由子

文部省選定 1991年教育映画祭最優秀作品賞・文部大臣賞

日本の途上国への開発援助は、その金額においては、近年世界のトップレベルとなっている。しかし、援助の内容となると、専門家不足で開発援助の質的側面は十分とはいえない。映画は、東南アジアの山岳地帯にすむ少数民族を取り上げ、その土地に暮らす人々にとって望ましい開発・援助とは何かを考える。

またこの作品は、実践経験のない若い開発関係者を専門家に育成するための映像教材として製作されたが、一般の人々にもわかりやすく静かに訴えるものとなっている。



東南アジアの山岳地帯には、50万人とも60万人とも言われる少数民族が数多くいる。彼らは独自の文化と言語を持ち、昔ながらの焼畑農業を続けながら、山から山へ移動していく。

伝統的な生活も、よくみると、衣食住のすべてを女性の労働に頼っている。しかもその労働は重く厳しく、食生活も蛋白質や脂肪の足りない偏ったものである。

そのうえ、子だくさん。衛生状態も悪く、病気になれば祈禱師に祈ってもらいしかなす術がない。

このような村にとって、望ましい援助とはどのようなものであろうか？